

開催地名	熊本県多良木町
開催日時	令和7年8月24日(日) 10:00～12:00
開催場所	多良木町多目的研修センター
語り部	松井 憲(広島県広島市)
参加者	多良木町長、多良木町危機管理防災課、自治会地区リーダー等 約80名
開催経緯	<p>近年は、自然災害が頻発化・激甚化しており、線状降水帯の豪雨が日常化している。我々も平成28年の熊本地震や令和2年7月の豪雨災害を経験・体験をしている。</p> <p>本日は、語り部様に平成26年8月20日に起きた広島市豪雨災害の経験、復旧や様々な対応などをお話いただけたらと思っており、本日の研修会が各地域・個人においての防災意識が高まることを期待している。</p>
内容	<p>(1) 広島市豪雨災害伝承館設立の経緯</p> <p>被災者住民が色々な復興プランを考え、全ての人々に災害での犠牲者が一人も出てほしくないという思いから広島市と時間をかけ2023年9月に伝承館をオープンさせた。</p> <p>被災者が伝承館の運営管理からプラン作成まで行っている。展示よりも学習をする研修室を広くとっており、自分や家族の命を助けるスキル・テクニック等の研修講習を実施している。</p> <p>今から11年前の広島市豪雨災害発生時は、避難指示も勧告も出なかった。私たちの被害以降、どのような状況でも避難指示等を出すように法律改正されている。</p> <p>(2) 広島市の被害状況</p> <p>発災前の8月19日から20日明け方にかけて局所的な豪雨が続き、安佐南区高瀬では1時間の降水量が87mm、24時間の降水量が247mmという当時観測史上最大の集中豪雨が発生。降り始めからの降水量が100mmを超えたあたりで土石流が発生。建物被害は全壊179棟、半壊217棟を含めて合計4,749棟。人的被害は死者が直接死74人、災害関連死3人の合計77人、負傷者69人。</p> <p>(3) 災害が起きた後</p> <p>当時、自宅が土砂で埋まってしまい10日後に土砂をどけることができたが、一番つらいのは災害が起きた後だった。行方不明の方が岩の下敷きになっているかもしれないため、自衛隊が重機で岩を処理していくと時々人のパーツや人自体がひっかかってくる。それが家の前で24時間1週間続いていた。寝てる間に重機の音が止まると誰か見つかったかもしれないと目が覚めてしまい、寝ることが出来なかった。また地元の人か確認する作業もしなければならなかったので寝てるようで寝ていない状況が続いた。</p>

今でも重機の音を聞くとふとその時の状態を思い出してしまう。

西日本豪雨災害の時には広島市のボランティア本部に入ったが、行方不明になっている家族の方を励ましたりする中で PTSD の診断を受けた。防災活動を辞めようと思ったが、家族の方に激励されて続けている。

被災をするとつらい思いを一生持ち続けなければならない。若い人や子供たちがそんな思いを持ち続けて一生生きていくのは大変で、そういった思いをしてほしくない。という意味でこのような活動を続けており、伝承館も作った。

#### (4) 防災リーダーのための防災

伝承館の来館者数が今年増加している。2024 年 1 月の能登半島の地震をきっかけに防災意識が一段と上がったと思う。しかし防災意識は上がる一方、避難する方は少ない。

住民は、自然現象と災害の区別がつかず、何が危険かわからない方が多い。そのため、正常バイアスが早期に働き、避難指示への反発さえ出してしまう。行政も施策の空回りや住民との双方向のコミュニケーションがとれていない場合が多い。そのため、防災に関して子供たちへの一貫教育をするとよい。いのちを守るスキル・テクニックを学校で学習する。また、地域では、近隣の防災リーダーと連携をとり、常にお互い助け合える状況にあるように機能させておく。

防災イベントは、数多く実施し地域全員の方が参加できるような形を作る。回数を行うことで、地域の人全員の理解率が高くなる。イベントに、キッチンカーを誘致すると、キッチンカーが来るというだけで集まる人が通常の倍になった例がある。学習会を開く際は対話型で進めていくとよい。また資料作成に関しては、記入式にして聞き手が参加しやすい形を作るとよい。防災備蓄倉庫の準備もしておくともよい。

#### (5) 災害について

自然災害とは、自然現象に人への被害が加わること。災害でいのちをなくさないためには逃げ遅れないことが大切。逃げ遅れないためには、『早く安全な所へ行く』と認識しておく。逃げるとなると、ずっと追い詰められて限界である危険を感じないと動かないので『行く』と認識しておく。『行くタイミング』は、警報が出るのを待たずに気象情報などから判断する。『行く場所』は、避難所だと入れない場合や、人数が多いと感染症のリスクもあるため、安全なところに、家族、兄弟、親戚がいる場合はそこに行くのが良い。

避難して失敗した、損したという方もいるが、損ではなく、家族を見に行き行って楽しかったという形でいったり、家族で安全な場所へ外食に行くといい。そうすると、避難も楽しく考えることができる。

	<p>ハザードマップは、常に見える場所に置いておくこと。自宅の周りしか見ない方が多いが会社や買い物先など、よく使うルートも見ておく。3年に1回更新されるため、3年以上前のハザードマップを置いてないか確認しておく。</p> <p>いのちをなくさない為の判断・行動として、3年ぐらい前までは自助（自分の命は自分で守る）とあったが、今は家族も入っている。「自分の命も家族の命も自分が守る」ということ。家族で行動して避難するということを考えることが大事。特に最近、食物アレルギーがある子供が多いので、家族と一緒に行動していると、コントロールできる。避難には車で移動することを進めている。車だと、大きな荷物や通院等も便利。</p> <p>地域の自主防災会で、声を掛け合う「共助」。地域で集まって防災に関する話することで、近所付き合いができ、近所でお互いに声を掛け合う意識を持つことが大事。</p> <p>西日本豪雨で早めに助かった方で、逃げるきっかけになったのが近所の声かけだった方もいた。</p> <p>消防や警察の「公助」は、いつどういう要請が入ってくるかわからず、1人1人を助けに行くことはできないため、災害が起きてからでないと動けない。</p> <p>災害前は、町の方で「指定避難所（一時緊急避難所）」が指定されているが、災害が起きて、家に帰れなくなった場合や家の崩壊、道路の寸断等で泊まる必要が出てきた場合は、名前が「生活避難所」に変わる。生活避難所になったら指定避難所から自主防が引き継いである程度形を作って、そこで生活している方々に運用してもらおうというのが国全体の流れとなっているが、被災した自主防の人が集まらない問題がある。そのため、民間で協力し合い、助け合いながら運営する必要がある。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>今日のお話で、皆さんにこういったことは経験したりして欲しくない。ということが一番心に残りました。貴重な体験談を改めて聞き、私たちも地域により一層防災意識を根付かせていき、災害で命をなくさないように。また、子供たちにも災害の恐ろしさを伝えていくよう頑張っていきたいと思う。</p>